



Title	ルーヴェン・カトリック大学所蔵ダウンガン関連資料群（リムスキー=コルサコフ・コレクション）の調査
Author(s)	海野, 典子
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 53-58
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.53
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88343
Type	article
File Information	JB014_013unno.pdf



[Instructions for use](#)

ルーヴェン・カトリック大学所蔵ダウンガン関連資料群 (リムスキー＝コルサコフ・コレクション)の調査

海野 典子

はじめに

筆者は、2017年9月8日、11-14日にかけて、ベルギー王国フラムス＝ブラバント州都ルーヴェン市に位置するルーヴェン・カトリック大学にて、中央アジアのダウンガン関連資料群、通称「リムスキー＝コルサコフ・コレクション」⁽¹⁾を閲覧した。

ダウンガン(トゥンガン、東干などとも。自称は回回 *Huihui*)は、「19世紀後半から20世紀中頃にかけて、中国西北部からロシア領及び旧ソ連領中央アジアに移住した中国系ムスリム(回族)を中心に形成された民族集団」[王 2005]を指す。ダウンガンについては、近年、言語学や人類学の分野で研究が盛んである⁽²⁾。2010年10月には日本の東京外国語大学で、2014年9月にはノルウェーのオスロ大学でダウンガンに関する国際ワークショップが開催されるなど、国際的な学術交流も進んでいる⁽³⁾。しかし、ダウンガン関連資料のなかには、本稿が取り上げるリムスキー＝コルサコフ・コレクション内のアイテムのように、いまだ研究者間で情報の共有がなされておらず、十分に活用されているとは言い難い資料があることも事実である。また、同コレクションには中央アジアにおけるダウンガンの歴史を知る上で興味深い文献が含まれているにもかかわらず、歴史学的観点から同コレクションを評価した研究は管見の限りない。そこで、本稿は同コレクションの概要や閲覧方法を紹介し、その史的価値を示すとともに、中央アジア史におけるダウンガン研究、及び中国ムスリム研究の位置づけを考える。

(1) ルーヴェン・カトリック大学の公式サイトには、Svetlana Rimsky-Korsakoff Dyer Collection と表記されている。本稿では「リムスキー＝コルサコフ・コレクション」と略記する。“Svetlana Rimsky-Korsakoff,” URL: <https://www.kuleuven.be/verbiest/sml/svetlana>, 閲覧日: 2018年2月18日。

(2) ダウンガン語研究の最新動向については[菅野 2013]に詳しい。人類学の分野では、ソレダ・ヒメネス・トヴァール(Soledad Jiménez Tovar)氏が目覚ましい研究成果を上げている(最新の業績は[Jiménez Tovar 2016])。

(3) 東京外国語大学で開催された「ダウンガン人に関する国際集会」の参加記は拙稿[山崎 2011]を参照されたい。

リムスキー＝コルサコフ・コレクションについて

リムスキー＝コルサコフ・コレクションは、1931年ハルビン生まれのロシア人で、後にアメリカのジョージタウン大学で中国言語学を学び、オーストラリア国立大学で教鞭をとったダウンガン語の先駆的研究者、スヴェトラナ・リムスキー＝コルサコフ・ダイアー (Svetlana Rimsky Korsakoff Dyer) 氏⁽⁴⁾が、2007年にルーヴェン・カトリック大学フェルビースト研究センター (The Verbiest Institute) 附属のスクート記念図書館 (Scheut Memorial Library) に寄贈したものである。フェルビーストとは、周知のとおり、フランドル出身のイエズス会宣教師で、清朝第4代皇帝である康熙帝 (在位 1661-1722) に仕え、天文学・地理学・数学をはじめとする西洋の最先端の科学技術を清朝に紹介しながら布教活動を行った、フェルディナント・フェルビースト (Ferdinand Verbiest: 1623-1688、中国語名は南懷仁) のことである。

ルーヴェン・カトリック大学で学んだ彼の名を冠したフェルビースト研究センターでは、スクート記念図書館所蔵の諸外国語コレクションを閲覧することができる。今回筆者が調査したリムスキー＝コルサコフ・コレクションは、280近くのアイテムからなる (カタログの詳細や資料請求方法は後述)。テーマが重複するものもあるが、アイテムの内容は以下の3種類に大別することができよう。

(1) ドウンガン語関連資料

コレクションの大半、250点ほどを占めるのが、中国言語学の専門家であったリムスキー＝コルサコフが各地で収集した、中国西北方言を土台とするドウンガン語関連の資料である。具体的には、中央アジアで刊行されたドウンガン語の教科書・文法書・辞書、詩集や小説⁽⁵⁾のほか、ロシア語・中国語・英語・日本語・フィンランド語で書かれたドウンガン語に関する研究書や論文が含まれる。出版年は1920年代から2000年代までと、幅広い。日本の中国言語学者である故・橋本萬太郎氏の著作も複数確認される。

(2) リムスキー＝コルサコフ自身の研究成果

第二に、[Rimsky-Korsakoff Dyer 1991] のように、リムスキー＝コルサコフ自身が中央アジアでのフィールドワーク経験を基に英語で執筆した、ドウンガンの歴史・言語・文化・社会・風俗習慣に関する研究ノートや論文の類である。(1)のドウンガン語関連資料のうち、約20アイテムがこれに該当する。

(4) リムスキー＝コルサコフの詳細な経歴については、本稿脚注1のルーヴェン・カトリック大学の公式ウェブサイトを参照。

(5) 最も多いのは、クルグズスタン出身のドウンガン作家・詩人であるヤスイル・シヴァザ (Iasyr Dzhumazovich Shivaza: 1906-1988) の作品である。

(3) ドゥンガンの歴史や文化に関する概説書

第三に、ドゥンガンの歴史や文化に関するロシア語・中国語・英語の概説書、約30点である。中国語図書の多くはドゥンガンや現在の中華人民共和国の回族に関する書籍であり、中国国内でも比較的容易に入手可能なものである（たとえば、ドゥンガンの中央アジアへの移住の経緯を論じた[優素福 2004]、回族の民間伝承をまとめた[李 1988]など）。意外にも、ドゥンガン研究の大家である回族研究者の胡振華氏やその弟子である丁宏氏の著作は見当たらなかった。

事前の準備

2017年9月の調査を希望していた筆者は、同年5月下旬にルーヴェン・カトリック大学のウェブサイトに記載されているメールアドレス(pieter.ackerman@kuleuven.be)に訪問予定を伝えるメールを送った。数日後に担当者のピーター・アッカーマン(Pieter Ackerman)氏から返信があったが、夏期休暇を挟んだためか、その後約2ヶ月にわたって連絡がとれなくなってしまった。7月上旬に再びメールを送ったところ、下旬になってコレクションのカatalogがエクセルファイルで送られてきた。カatalogは現在も整理中らしく、資料の配列順がほとんど統一されていないため、若干見づらい。出版年月日順や出版地別に分類されていればより見やすかったのではないかと思う。今後の改善に期待したい。

アッカーマン氏によると、コレクション利用の一週間前までに、①閲覧を希望する日時、②閲覧を希望する資料のタイトル、の2点を知らせる必要がある。前述のカatalogには資料請求番号が記載されていなかったため、筆者の場合はエクセルの蛍光ペン機能を使って閲覧を希望するアイテムにマーカーを引き、アッカーマン氏に送った。一度に閲覧できるアイテムは10までと決められているということだが、申請数は特に制限がないようだったので、約40のアイテムを事前に申請した。また、資料の持ち出しや複写は許可されていないが自由に写真撮影を行ってもよいと言われたので、カメラを持参することにした。

なお、アッカーマン氏をはじめとするフェルビースト研究センター職員とのメールのやり取りや現地での会話は、基本的に英語で行った。同研究センターには台湾や中国大陸出身のスタッフも多く、中国語で話しかけると歓迎された。ベルギーの公用語であるオランダ語やフランス語を流暢に話すことができなくても、文献調査に支障はないだろう。

現地での調査

リムスキー＝コルサコフ・コレクションを利用するためには、同コレクションが所蔵されているスクート記念図書館(住所はVlamingenstraat 1, 3000, Leuven)ではなく、フェルビースト研究センター内の閲覧室(Naamsestraat 63)に行かなければならないので注意されたい。

フェルビースト研究センターの閲覧室は、美しい西洋建築に囲まれた小さな中庭に面している。静謐な雰囲気を感じられる中庭には、清朝の欽天監副（天文台副長）を務めたフェルビーストが作成したとされる、天球儀のレプリカが設置されている。ルーヴェン・カトリック大学は一種の観光スポットになっているらしく、滞在中は観光客や大学関係者が天球儀の写真を撮っているのを幾度も目撃した。

研究センター到着後は、まず一階の入口ドアを入れてすぐ左側に位置するオフィスで氏名と来館目的を告げる。パスポートなど身分証の提示を求められることすらなくスムーズに入館することができたが、念のため写真付きのIDを持参したほうが良いだろう。筆者が事前に申請していた約40のアイテムは、アッカーマン氏がすでに図書館から取り寄せてくださっていた。コレクションは、オフィスの向かい側にある閲覧室で自由に閲覧・撮影することができる。作業用テーブルは申し分のない広さで、カメラやパソコン充電のための電源も使用可能である。たまにスタッフや学生が荷物を取りに来たりする以外には閲覧室に筆者一人きりであり、黙々と作業を行うことができた。総じて快適な作業環境であったと言える。

ルーヴェン滞在中、筆者は約20のアイテムを追加申請した。筆者がリムスキー＝コルサコフ・コレクションを実際に利用したのは正味5日間であったが、合計60ほどのアイテムを閲覧・撮影するのに十分な時間であったと思う。長期休暇期間や土日祝日を除けば、閲覧室は基本的に平日午前9時から午後5時まで開室しており、ランチタイムに一時的閉室するようなこともなかった。研究センターを出てすぐのナムセ通り(Naamsestraat)にはレストラン・カフェやスーパーがたくさんあり、食事場所には困らない。市庁舎やマーケット広場が近く交通の便が良い上に、周辺には宿泊施設も複数ある。効率よく調査を進めることができるだろう。

史料的価値

前述のとおり、リムスキー＝コルサコフ・コレクションはダウンガン語関連資料がその大半を占めている。言語学の専門家にとっては、特に多くの発見があるに違いない。同時に、20世紀前半に出版された一部のアイテムは歴史研究の観点から見ても興味深い内容を含んでいる。たとえば、ロシア・ソ連領中央アジアに移住して日の浅い、中国領出身の漢語を話すスリムが「ダウンガン」として現地社会に定着していく様子⁽⁶⁾は、移住の経緯をまとめた論文や彼らの口承文芸に関する研究、ソ連の政治指導者や社会主義体制を称賛する詩が取

(6) ドウンガンのロシア・ソ連領移住には主に三つの大きな波がある[王 2012: 347]。第一波は 1860 年代に陝西・甘肅地域で蜂起し、清朝の鎮圧を受けて 1870 年代後半にロシア帝国領に亡命した人々。第二波は、1880 年代、ロシア軍占領下にあったイリ地方が清朝政府に返還されたときに移住した人々。第三波は、1962 年に起きたイリ事件の際に新疆から旧ソ連領中央アジアへ亡命した人々である。

録されたダウンガン語文学作品の記述などから窺い知ることができる。また、1930年代に相次いで刊行されたダウンガン語の正書法や文法に関する書籍、及びダウンガン語・ロシア語辞典は、ダウンガンの言語状況の変化、ソ連の研究者の彼らに対する関心の高さを伝えてくれる。

ただし、これらの文献を史料として扱う際には注意を要する。なぜならば、印刷が鮮明ではなく書誌情報が不明瞭なもの、リムスキー＝コルサコフが複写し製本した際に落丁が生じたと思われるものも少なくないからだ。しかし、彼女が収集したこれらのアイテムが、ダウンガンの歴史を知るための貴重な文献資料であることには変わりない。また、至る所に残されたメモ書きからは、リムスキー＝コルサコフがダウンガンの歴史・言語・社会・文化・風俗習慣に深い関心を寄せていたことが改めて確認される。さらに、上記文献のなかには、クルグズスタン出身のダウンガン人歴史学者であるムハメド・スシャンロ (Mukhammed Iasyzovich Sushanlo) をはじめとする世界各地の研究者が、リムスキー＝コルサコフにこれらの資料を寄贈したときに書いたと思しき署名が見られる。これらの署名は、リムスキー＝コルサコフの学術ネットワークの広さを物語っていると言えよう。

テュルク系ムスリムやロシア系住民に比べて人口が圧倒的に少なく、中央アジア社会での政治的・文化的影響力が限定されているダウンガンの歴史は、これまで十分に研究されてきたとは言いがたい。しかし、中国領出身のムスリムというマイノリティの視点からロシア・ソ連統治下の中央アジアの社会状況や民族政策を再検討することは、中央アジア近現代史を多角的に論じる上で大きな意味を持つはずである⁽⁷⁾。また、ユーラシア大陸を横断する現代版シルクロード経済・外交圏の構築を目指す「一帯一路」構想が中国によって提唱され、推し進められている今日の世界にあって、長い間中国との経済・文化交流を続けてきた中央アジアのダウンガンが果たすだろう役割は無視することができない。今回筆者が調査したリムスキー＝コルサコフ・コレクションは、こうしたダウンガンの歴史や文化を知る上での重要な手がかりであり、豊富なアイテム数や出版地・言語・ジャンルの多様性を誇るユニークな資料群である。中国の中央民族大学の東干学研究所やクルグズ共和国民族科学アカデミーのダウンガン学・中国学研究センターに所蔵されている資料などと併せて、今後多くの研究者が同コレクションを利用し、中央アジア研究や中国ムスリム研究を進展させていくことが期待される。

(7) ドウンガンとほぼ同時期に中国領中央アジア(東トルキスタン、新疆)からロシア・ソ連領中央アジアに移住したテュルク系ムスリムの歴史やドウンガンとの関係については、「ウイグル」ネーションの成立過程を明らかにした [Brophy 2016] に詳しい。

最後に

調査に際して、ルーヴェン・カトリック大学フェルビースト研究センターのスタッフであるピーター・アッカーマン氏やシェリル・リャオ (Cheryl Liao) 氏、及びスクート記念図書館スタッフの方々には大変お世話になった。また、本調査は、文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)「19～20世紀中央ユーラシアにおける越境と新疆ムスリム社会の文化変容に関する研究」(研究代表者：新免康氏)の助成を受けて実施することができた。各関係者にこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

参考文献一覧

- Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Jiménez Tovar, Soledad. 2016. “Limits of Diaspority in Central Asia: Contextualizing Dungan’s Multiple Belongings,” *Central Asian Survey* 35(3), pp. 387-404.
- 菅野裕臣 2013 「最近のドゥンガン研究の概況——特にソ連崩壊後の言語学研究について」『日本中央アジア学会報』9、57-66頁。
- 李樹洪 1988 『回族民間故事集』銀川：寧夏人民出版社。
- 王建新 2005 「ドゥンガン」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、381頁。
- 2012 「中央アジアのドゥンガン」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』東京：明石書店、347 - 351頁。
- Rimsky-Korsakoff Dyer, Svetlana. 1991. *Soviet Dungans in 1985: Birthdays, Weddings, Funerals and Kolkhoz Life*, Taipei: Centre for Chinese Studies.
- 山崎典子 2011 「「ドゥンガン人に関する国際集会」に参加して」『日本中央アジア学会報』7、65-70頁。
- 優素福 2004 『悲越天山 東干人紀事』銀川：寧夏人民出版社。

(日本学術振興会特別研究員PD)